
少し遅いプロポーズ(ダーツ×ファリナ)

ダフネ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

少し遅いプロポーズ（ダーツ×ファリナ）

【Nコード】

N1719B

【作者名】

ダフネ

【あらすじ】

ダーツが海に沈んだところから、話が始まります！

リキア地方にある港町バドンは、勇敢な船乗りや名高い海賊をたくさん生んだ所だ。

だが、海賊同士の戦いがある。

攻めてきた海賊達はバドンをねじろとする海賊達だった。

すぐに切りかかれ、ファーガスが一瞬体勢を崩す。

「！お頭！！危ねえ！！」

若くたくましい一人の男がそれに気付いて老船長に駆け寄り、船長を間一髪で突き飛ばした。

その男の名はダーツ。

ダーツは、今度は自分に向けられる敵の攻撃を何とかかわしだが、その反動で柱に頭を激しく打った。

「がっ・・・」

よろめいた所に斧で切りかかれ、

肩から胸にかけて肉をえぐられる鋭い痛みを感じたが反射的に後ろに下がった。

血が流れ、彼の体がよろめき、甲板の向こうへ倒れこむ。その先は、海。

「！ダーツ！！」

ファリナは上空から彼が攻撃を受けて落ちるのを見ていた。

彼の名を叫んで、ただちに急降下をする。

「ダーツ！」

もう一度叫んで、ファリナは手を伸ばす。

（あと少し・・・ほんの・・・）

だが、彼女の伸ばした手は無慈悲にも水面に届く前に止められた。さすがの天馬も水の中に行く事は出来ない。

「マーフィ！上で待ってなさい！」

自らが鎧をつけているのも構わずマーフィの背から海へ飛び込もう

とした途端、

マーフィが体を震わせ急に舞い上がった。

「！マー・・・」

瞬間、自分がさっきいた場所に手斧が落ち、水しぶきがあがる。

一瞬その斧に気を取られた後、敵の攻撃をかわしつつ必死で海中を見るが、

彼の姿はもう見えない。ダーツの姿は海中に消えてしまった。

先ほどまでは海水に赤い液体が混じっていたのだが、

何事も無かったかのようにまた澄んだ水に戻っていた。

やがて、戦いは終わった。

自分達の勝利だった。

味方に死亡者はいなかった。・・・ただ一人を除いては。

「ファリナのお嬢ちゃん・・・その、すまねえ！」

ファーガスが頭を下げる。

「やっやっだー船長さん、あいつバカだからあんな死に方しても仕方ないですよ。」

海で死ねて寧ろ本望じゃないかな。

それより船長さんに頭下げさせたらホント、私があいつに怒られますって。」

「嬢ちゃん・・・」

そして、彼女は無造作に彼が落ちた場所に花を投げたのだった。

その後、ファリナはファーガス海賊団から離れた。

それからはバドンの近郊から飛び立ちゆっくりと海の上を旋回する、一頭の手馬が見られるようになったと言う。

「はあ・・・」

さて、その手馬を操っているのは間違いなくファリナだった。

（あたし・・・何でこうしてるんだろう・・・。）

重いため息をつく

「これも全部あいつのせいよ！バカダーツ・・・それに・・・レベッカに何て言えばいいのよ・・・。」

またしてもため息をつく。
たまにバドンに遊びに来ては、嬉しそうにダーツに差し入れをしていたあの子。

かつて一緒に戦った仲間でもある。

いい雰囲気に見えて、少し（どうしてか分からないけれど）気になつて聞いてみたら、

ダーツは、あの子は自分の妹みたいな存在なんだと言っていた。

（でも、お互いの話を聞くうちにファリナは二人が本当の兄妹だと確信していたのだが。）

それからレベッカにはちゃんとした彼氏がいるとも言っていた。

名前はロウエン。確か、フェレの騎士だった。

後からレベッカ本人に聞いてみると、少し笑いながら頷いていた。

どうやらレベッカの村を助けてくれた白馬の王子様らしい。

（彼の馬は栗毛だったけれど。）

そうそう、不幸中の幸いと言うか、ダーツが海に沈んでからここ数日、

レベッカがファergus海賊団を訪ねてくる事は無かった。

「もうっ死んだ後にも面倒な事しか残していかないんだから。」

あの子は、ダーツが海に沈んだと知ったらどんなに悲しむだろうか。けれど、教えない訳にもいくまい。

ダーツは時間に余裕があればあの子を実家の近くまで送って行く事もあり、

ファリナは彼女の家を知っていた。

でも、実際家の前まで来るのは初めてだった。

意を決してドアを叩く。

すると走ってくる足音が聞こえ、ドアが開く。

「はーい！あっファっファリナさん！！」

見るとレベッカの顔は紅潮していて、ファリナを見て更に興奮して

いるようだった。

「レベッカ？どうしたの？」

「ダーツお兄ちゃん……ううんっダンお兄ちゃんが帰って来たんです！！」

「ええ！？」

「でも傷だらけで、全身ずぶ濡れで……。」

レベッカが不安そうな表情になる。

「ほっ本当なの？会える？話せる？」

「今は寝てます……でも、すごいケガだったけど、私が駆け寄ったらレベッカ……」

って、眩いて倒れて……

でもっ時々目を覚まして水を欲しがったりしたんです。」

「顔、見てもいい？」

「もちろんです！こっち来て下さい！」

ドアを開けると、そこには間違いなくダーツがいた。

「お兄ちゃん！」

「おうレベッカ。」

「ダーツ、本当にあんた……？」

ファリナがベッド付近まで近付いた時、ダーツ……

いや、ダンは不思議そうに自分を眺めているのに気付いた。

「？レベッカ、その美人は誰だ？友達か？」

「え……？」

レベッカとファリナは顔を見合わせる。

「ダーツ……？あんたとぼけてんの？」

「？何がだ？それより俺はダンだが。」

「ダーツ……あんたまさか……。」

ファリナの胸に鋭い痛みが走る。

「レベッカご免、ちよつと……外に出るわ。」

「あっ……は、はい……。」

ファリナと入れ替わりに、青年が入って来た。

赤茶色の髪と目、真面目そうな顔つきをしたレベッカの幼馴染ウィルである。

「ダーツ！あ、ダンか。やっぱそうだと思ってたんだよねー。」

「ウィル？」

「あつ俺の事分かるんだ！」

「当たり前だろうが！」

相変わらずの幼馴染にはあ……とため息をつく。

しかしそんな彼を見て、ウィルは少しだけ怒ったような顔をした。

「当たり前じゃないよ……ったく、お前な、この前は俺やレベッカの事を忘れてたかと思えば、

今度はこの間までの事忘れてたんだって？器用だなー。」

「うるせーよ！」

ダンが、凶星を指されて叫ぶ。

「それに完全に忘れた訳じゃねえ。所々覚えてるし、まあ、何とか思い出せて来た。

確かに……お前やレベッカの事は……悪かったと思ってる。」

「それはもういいよ。」

でも、ちよつと会話聞いてたけど、ファリナさんの事は思い出せていないと。」

ウィルが素早く突っ込む。

「……うっ。」

痛い所を突かれたとダーツは黙り込む。駆け寄ってきた青髪の女。

「それが……。」

「おっ！？思い出したか？」

「ファリナって……。」

「うんうん。」

「あの美人か？青髪の……。」

「そーだよ。でも、駄目だねこりゃ。」

はあっとウィルがため息をつく。

「何がだよ？」

「なーんだ、今日はこれを渡そうと思って急いで来たのに。」

「何だこりゃ？」

「お前を看病した時にさ、ポケットから袋とリボンと一緒に出てきたんだよ。」

でも、袋は海水しみてボロボロだったから、

とりあえず中のものだけでも保管しとこうと思ってさ。」

「これが？」

「ああ。綺麗な細工だね。でも手作りだろ？お前器用だったもんなー。」

「・・・何で隠してた？」

「だって誰かにあげるならともかく隠すような感じだったしさ、まさかお前にこんなものつける趣味があるなんて思わなかったから。レベッカに知らせたらあいつショック受けると思ってとっさに隠したんだよ。」

「ばっ馬鹿言うんじゃないよ！」

「そーか。とりあえず今日の用事はこれだけだからさ。またな。」

「おう。」

ウィルが渡してくれたイヤリングをしげしげと眺める。

（真珠のイヤリング・・・俺にこんなもんつける趣味はねえ！

そう、これを渡したいと思う誰かがいた筈だ。・・・レベッカだろうか。）

そこまで考えた時、ふと、あの青髪の女が浮かんだ。

「お兄ちゃん・・・。」

「おっどうしたレベッカ？」

「お兄ちゃん、本当にファリナさんの事忘れたの？」

「レベッカ？」

「もうっ知らない！！でもね、ファリナさんの事は思い出さないと駄目なんだからね！！」

「レベッカ？何言い争って・・・。」

「ファリナさん・・・。」

「お兄ちゃん、ファリナさんの事だけ忘れちゃってるの・・・他の事はちゃんと思いで出せてるのにひどい、どうして？」

「ちよっちよつと泣かないでよ、レベッカが泣く事じゃないでしょ。」

「だって・・・ファリナさん・・・。」

「あはは、大丈夫だって。」

「あんたが・・・ファリナ・・・。」

「そ。あたしがファリナ。」

「あんた、俺を知ってるのか。」

「知ってる・・・ま、そうね。別に覚えて無くてもいいわよ。」

ファリナはそれからもダーツ、いやダンの家に何度か立ち寄っては軽く言葉を交わす程度の付き合いはしていた。

もしかしたら、あの人はダーツじゃなくて、本物のダーツはどこかにいるのかもしれないという思いをよぎらせながら。

ある日、ファリナは眺めの良いバドンの港付近の丘にいた。ここなら港全体を見渡せる。

と、後ろから足音がして、隣にいるマーフィがいなくて。

「・・・ここにいたのか。」

聞きなれた男の声がした。

「あら、よく分かったわね。」

振り返らずに答えると、男が隣に立つ気配がした。ちらっと横を見ると紛れもなくダーツ・・・いや、ダンである。

「ここらでウロウロしてる天馬騎士は、あんたしか見た事ねーからな。」

「そう言えばそうね。」

言ったつきり、二人の間に沈黙が続く。

「・・・悪かった。」

その沈黙を破ったのは彼だった。

「なっ何で謝るのよ？」

「・・・これをやるよ。」

彼が手を拳のまま差し出してくる。

「あら、何？」

ファリナも手を差し出す。すると、ダーツが手のひらに何かを置いてきた。

良く見ると、それは大粒の真珠がついた器用な細工が施されているイヤリング。

「綺麗じゃなーいっ一体どうしちゃったの!？」

「は? いくつかお前がそう言ったんだろ？」

「え？」

「寒いイリアで真珠は貴重なんだって。」

「あ、確かにそんな事言ったわね。それでわざわざ? あんたにしちや気が利いて・・・。」

「お前な、自分で言っというてそっ・・・その後まで言わせんのかよ! 気付けよ!」

「え!？」

ファリナが目を見開く。

(・・・だから、真珠がついた物を男性から女性に贈るの。素敵でしょー!)

まっあんたには関係ない話だけどね。)

ふと、会話の一部を思い出した。

ダーツ・・・いや、ダンは相変わらず怒っている。

「何不思議そうな顔してんだよ!」

「あ、ちよっちょちよっちと待ってよ突然キレないでくれる!？」

「と、とにかくそう言う事だ。けど・・・嫌なら返せ。」

「あ・・・あはは・・・。」

嬉しさのあまり目に涙がにじむ。勝手に体が動いて、彼に飛びつい

ていた。

「! あ、おいつ。」

「やっだ返す訳ないじゃない! 本当に、思い出したの?」

「ああ。・・・けどな、少し前から段々と思い出せてたんだ。」

「初めて会った時の事も?」

「ああ。お前が突然声をかけてきたんだよな。」

「! そこまで思い出してたなら何で・・・。」

「いや、これを渡して・・・言うタイミングを見計らってた。」

「ばか!・・・って、いつまで抱えてるつもりよ、下ろしてよ。」

「お前から抱きついて来たんだろーが!!」

そして。

「ダーツ、準備出来た? レベッカやお父さんに挨拶した?」

「ああ。」

「ロウエンにレベッカを頼むってちゃんと言った? ウィルには?」

「だーかーら大丈夫だったの。後はまあ、お頭やガイツ達に挨拶しねーとな。」

ま、それは後で寄ればいいだろ。」

「じゃあ早速イリアへ挨拶に行きましょう!」

「そうだな。えーと、お前の姉さんと、旦那のケントにだろ?」

「あつてもまずオスティアに行かなくちゃ! ヘクトル様の所に行つてフロリーナに会うのよ。」

ちゃんと愛想良くしてよ、フロリーナは恐い顔してる男を見たらすぐ泣き出すんだから。」

「お前な、記憶が戻った途端にそれか。」

「え? 何、聞こえないわ。」

不意に、ファリナが自分を必死になって助けようと手を伸ばしてくる場面、

そして記憶を失っていた自分の前で見せた表情、

そして自分に抱きついてきた場面が思い出されてぼそつと呟く。

「もうしばらく記憶喪失でもよかったかな・・・。」

「何か言った？」

「何でもない。」

ため息をついた後、いつになくご機嫌そうなファリナの顔を見て、自分の顔にも知らず知らずの内に笑顔が浮かぶ。

ファリナの耳についている真珠のイヤリングが、淡い光を宿していた。

（後書き）

ダツファリ最高ですね！！自分的にはやはりダツファリの子供はノアだと思いますので、

今度は親子話も書けたら書きたいと思います。

ファリナとカアラ支援を読んでいると、

いつか二人で傭兵をやるといっているのがそのままノアファイルにかぶるんで（笑）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1719b/>

少し遅いプロポーズ(ダーツ×ファリナ)

2010年10月17日04時57分発行